

司式:大谷 昌恵  
奏楽:山田 絵里

前奏:「いざ来ませ、異邦人の救い主よ」(J.S. バッハ)

招詞:城門よ、頭を上げよ、とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。栄光に輝く王とは誰か。万軍の主、主こそ栄光に輝く王。(詩24:9-10)

讚美歌:16「われらの主こそは」

罪の告白・赦し

聖霊を求める祈り

朗読聖書①創世記 12. 1-9

◆アブラムの召命と移住

- 01 主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷/父の家を離れて/わたしが示す地に行きなさい。
- 02 わたしはあなたを大いなる国民にし/あなたを祝福し、あなたの名を高める/祝福の源となるように。
- 03 あなたを祝福する人をわたしは祝福し/あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて/あなたによって祝福に入る。」
- 04 アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。
- 05 アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方へ向かって出発し、カナン地方に入った。
- 06 アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モレの榿の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。
- 07 主はアブラムに現れて、言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。」アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。
- 08 アブラムは、そこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。
- 09 アブラムは更に旅を続け、ネゲブ地方へ移った。

朗読聖書②マタイによる福音書 1. 1-17

◆イエス・キリストの系図

- 01 アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。
- 02 アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、
- 03 ユダはタマルによってペレツとゼラウを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、
- 04 アラムはアミナダブを、アミナダブはナフションを、ナフションはサルモンを、
- 05 サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオバドを、オバドはエッサイを、
- 06 エッサイはダビデ王をもうけた。ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、
- 07 ソロモンはレハバムを、レハバムはアビヤを、アビヤはアサを、
- 08 アサはヨシャファトを、ヨシャファトはヨラムを、ヨラムはウジヤを、
- 09 ウジヤはヨタムを、ヨタムはアハズを、アハズはヒゼキヤを、
- 10 ヒゼキヤはマナセを、マナセはアモスを、アモスはヨシヤを、
- 11 ヨシヤは、バビロンへ移住させられたころ、エコンヤとその兄弟たちをもうけた。
- 12 バビロンへ移住させられた後、エコンヤはシャルティエルをもうけ、シャルティエルはゼルバベルを、
- 13 ゼルバベルはアビウドを、アビウドはエリアキムを、エリアキムはアゾルを、
- 14 アゾルはサドクを、サドクはアキムを、アキムはエリウドを、
- 15 エリウドはエレアザルを、エレアザルはマタンを、マタンはヤコブを、
- 16 ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスが生まれ

になった。

17 こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまでが十四代である。

祈祷

聖なる主なる神さま、聖名を崇め賛美致します。12月に入って最初の主日、そして、待降節第二主日の朝、あなたは、私たち一人ひとりに新しい命を与え、この礼拝の場へと導いてくださいました。ありがとうございます。二本目のロウソクに火が灯され、御子のご降誕に向けての歩みが一歩近づいたことを、私たちは大きな恵みへの期待をもって、この朝、それぞれの心に刻んでいます。

神さま、あなたは何時も、どんな時にも、私たちを、大きな愛とお恵みで包んでくださいます。しかし、この一週間の歩みを振り返って見たとき、私たちは、本当に、そのあなたのお恵みに相応しい行いができていたでしょうか。自分の事ばかりを考え、他者の痛みが気にならず、気がついてそれを我が事として考えようとはせずに過ごしてしまったことを、今、ここに懺悔致します。アドヴェントの時は、御子のご誕生を迎える心備えをする時であるばかりでなく、悔い改めの時でもあります。どうか、私たちそれぞれが、心からの悔い改めをし、御子のご降誕を、本当に心から喜ぶことができる時としてくださいますよう私たちをお導きください。

神さま、私たちはクリスマスに向けての備えを、喜びをもって進めていますが、世界に目を向ければ、戦争や災害で今もなお、苦しみの中にある人が大勢いらっしゃいます。クリスマスを迎えるどころではなく、日々の生活にさえ困っている人々がたくさんいます。どうか苦しみや痛み、悲しみの中にある方々に、あなたが救いの御手を差し伸べてください。特に、それぞれの場所にあつて辛い状況に置かれている幼子のことを覚えます。子供たちが、心からの笑顔を取り戻せるように、世界の隅々にまで喜びの訪れが届けられますようにと祈ります。

神さま、本日は、佃雅之牧師が御言葉の取次ぎをしてくださいます。どうか佃牧師の上に豊かな聖霊が注がれ、大胆に御言葉を語ることができますようにお導きください。そしてまた、聴く私たちの心を開き、御言葉がしっかりと届けられますように整えてください。

今日は、主の晩餐が執り行われます。あなたによって備えられた食卓に一人でも多くの方が与ることができますようにと願います。しかし、願いながらも、心や体に不調を抱える方、それらの方々に付き添う方、その他、それぞれの都合で、今日、願いながらも、この場に来ることができない方がいらっしゃいます。それらの方々の上にも、ここに居る私たちと同じ恵みと祝福が与えられますようにと心から願います。今日、日本中、世界中で献げられる礼拝の上に、あなたからの豊かな顧みがありますように。

この感謝と願いの祈り、私たちの救い主、イエス・キリストの聖名をとおして御前にお献げを致します。アーメン。

讚美歌:233「高く戸を上げよ」

説教 「救いは歴史の中に」

佃 雅之

教会の暦では先週から待降節に入りました。待降節は主イエス・キリストのご降誕を待ち望むと同時に、神が約束された救いが歴史の中で確かに実現したことを改めて心に刻む時でもあります。その救いの約束は、今日

与えられた御言葉の中に、はっきりと示されています。

第一福音書記者マタイは、キリスト誕生の出来事を長い系図を記すことから始めました。この系図は“聖書を手にした人にとって最初の試練だ”と言われてきました。アブラハムから始まりイエス・キリストの誕生まで、その間に聞き覚えのある名前が幾つかありますが、キリストの言葉も、御業も書かれていませんから、多くの方にとって、決して興味深いとは言えないものです。

私たちは“系図”と聞くと、自分の先祖を誇り、先祖の歩んだ歴史によって自分を少しでも立派に見せようとするものだと考えがちです。あるいは、その反対に、私の家系には、こんなに立派な人がいた。けれども、私はとても先祖のようにはなれないと、どこか卑屈な思いに捕らわれてしまうこともあるかもしれません。しかし、ここに書かれている系図を注意深く読んでみると、決して先祖の名を誇り、自分たちの血筋やアイデンティティーを示そうとしているのではないことが次第にはっきり見えて来ます。なぜなら、この系図をとおしてマタイが語ろうとしていることの中心は、“主イエスこそ待ち望まれてきたメシアである”という一点にあるからです。マタイが福音書の冒頭に系図を置いたのは、イエス・キリストはどのようなお方であるのかを明らかにするためでした。系図というものは、遠い昔の物語に過ぎないように感じられますが、今の私たちの信仰生活と深く結びついています。イエス・キリストの系図が今の私たちに何を語ろうとしているのか、その間いをもって読み返すと、名前が並ぶだけに見えるこの箇所にも、実は豊かな教えと恵みが刻まれていることに気づかされます。

当時のユダヤ社会では、系図は男性によって受け継がれるものであって、家計の中に女性の名を挙げることはありえないことでした。ところが、この系図には女性たちの名が記されています。3 節に「タマル」、5 節に「ラハブ」と「ルツ」、6 節に「ウリヤの妻」と書かれています。この 4 人は旧約聖書に登場する女性たちです。なぜマタイは、ここに女性の名を記したのでしょうか。

3 節の「タマル」は、ヤコブに与えられた 12 人の子の一人である「ユダ」の長男の妻でしたが、夫は早くに亡くなってしまいます。当時の習慣では、夫との間に子供がいなければ、弟を夫として迎え子を残すことが求められていました。しかしその弟も亡くなってしまいます。子を残す望みを失った「タマル」は身分を隠して遊女の身なりをし、夫の父親の「ユダ」の前に座り込み身籠った、謂わば姦淫の罪を犯した人です。

5 節の「ラハブ」はエリコの街で遊女として生きた女性でした。「ラハブ」は社会から見放され、軽蔑される立場にありましたが、神を信じ、その信仰ゆえに家族と共に救われた人です。同じ 5 節に登場する「ルツ」は、病や飢えに苦しむ姑ナオミを見捨てず、誠実に寄り添って生きた女性ですが、異邦人であるモアブ人でした。モアブ人は、かつてイスラエルを誘惑して罪に導いた民族として忌み嫌われていました。

ここまでで名が挙げられている 3 人の女性は、それぞれの結婚生活の中で人には言えないような思いを抱え心の痛む出来事を潜り抜けてきた人々です。しかし、神は彼女たちの歩みをも大きな救いのご計画の中に取り入れ、むしろその人生をとおして、祝福の約束が途切れないように導いてくださいました。ここにはどのような人の生涯も御手の中で用いてくださるという確かな証しが示されています。

6 節の「ウリヤの妻」と言うのは**バト・シェバ**(בַּת שֵׁבַב) のことです。マタイ

は敢て名を上げずに、「ウリヤの妻」と呼びます。それは彼女の過ちよりも彼女の人生を深く傷つけた「ダビデ王」の罪を思い起こさせるためです。**バト・シェバ**は、ダビデ王の忠実な部下であった「ウリヤの妻」です。**バト・シェバ**に一目惚れした「ダビデ王」は、部下のウリヤを戦場の最前線に送り死に追いやり、聖書の中でも最も痛ましい出来事の一つです。「ウリヤの妻によってソロモンをもうけた」というのは「ダビデ王」の生涯における最大の不祥事、姦淫の罪を指摘しています。

この系図は、決して女性の罪の物語ではありません。むしろそこに浮かび上がってくるのは男性の側の過ちと弱さです。王であっても、権力者であっても、男女の肉体的な関わりという領域においては、一人の弱い人間としての姿を隠すことができません。私たち人間は男女の関わりの中で自分を制御できず、愚かな選択をしてしまうことがあるものです。聖書は、そのような人間の弱さや恥を隠さず示しています。むしろ、そうした現実の中の只中にこそ、神の憐れみと救いの計画が働いていくことを伝えているのです。最も優れた英雄と言われた「ダビデ王」でさえ罪を犯しました。その罪の痕跡が主イエスの系図の真ん中に刻み込まれています。ダビデはイスラエルの偉大な王としてだけでなく、罪人の代表としてここに名を遺されているのです。

この系図は人間の罪と、その罪によって引き起こされた悲惨な出来事とおして、神の救いの御業が途切れることなく働かれたことを語っています。主である神は、人間の輝かしい功績ではなく、むしろ人の弱さと罪をも包み込み、そこから救いの道を開かれたのであります。もしも神が、彼らの過ちを厳しく取り扱われ、罪の重さに応じて裁きを下されたなら、この系図はどこかで途切れ、救いの物語そのものが闇に沈んでいたかもしれません。しかし神はそうされませんでした。罪に落ちた者を見捨てることなく、憐れみをもって拾い上げ、御子へと繋がる救いの道を守り抜いて来られたのです。この系図は人間の罪よりも遥かに大きい神の赦しが描かれています。イエス・キリストによる救いは、どのような過去や背景を持つ人にも開かれているからです。

人はしばしば、“私のような者は、神に受け入れられない。私はクリスチャンには相応しくない”と思ってしまう。しかしこの系図はその逆を宣言しています。神の救いは傷ついた人、道を踏み外した人にも等しく注がれているのです。私の神は完全な人ではなく、弱さの中にある人をそのまま受け入れ、救いの歴史に用いられるお方なのです。

6 節の後半からは、「ダビデ王」以降の王の名前が並べられています。旧約聖書にある王たちの物語、列王記や歴代誌に登場する男たちです。彼らもまた、罪を犯しました。主なる神を拝むことができなくなり偶像に心を傾けたのです。彼らは預言者の語る神の言葉を大切にすることができませんでした。罪を重ねた歴代の王たちの結末として、イスラエルは『バビロン捕囚』という破局を迎え、その出来事が 11 節に「バビロンへ移住させられた」と記されています。12 節以降の名前の中には、旧約聖書に、その名も、その生涯の物語も見当たらない人が入っています。この系図は歴史に名を残す偉人たちの名簿ではありません。ここに名を連ねている人々の歩みは決して平坦ではありませんでした。彼らは、時に、苦難に押し潰されるような思いを経験し、逃れることのできない悲しみや苦渋の中を歩きました。けれどもその厳しい人生の道行きの只中にこそ、彼らは気づかされていったのです。自分が本当に頼るべきお方は誰なのか、人生を支え導き続けてくださるお

方は誰なのか、犯した罪や身に降りかかった苦難は、彼らを神から遠ざけたのではなく、真の生活、すなわち、神に信頼して生きるとはどういうことであるかを教える出来事になったのです。

マタイが系図に記したこれらの名前は、それぞれの人生をとおして神に鍛えられ、神に立ち帰り、神の約束に、より頼んだ人々の名前です。罪と恥に覆われた一人ひとりの人生が神のご計画の中にあつたことが語られています。

17 節を見ると、マタイは、このイエス・キリストの系図を 14 代ずつ、三つに区分して記したと書かれています。第一は、アブラハムからダビデまで、イスラエルが神の約束のうちに成長した時代です。第二は、ダビデからバビロン捕囚まで、繁栄の陰で徐々に神から離れ、没落へと向かった時代です。第三は、捕囚からキリストまで、神の沈黙が続き、“暗黒”とも言われる時代です。私たちの人生にも、順調な時もあるれば、失敗や挫折、祈りが届かないように感じる時があります。教会の歴史も、光の時、繁栄の時ばかりではありません。しかし、暗闇の中にこそ救い主は来られます。私たちの現実の只中に主は宿られます。人が信仰の道を見失うことがあっても、神は、決してその手を離さずに導いてこられたことを、この系図は証しています。神はいつも私たちと共におられ、約束を繋ぎ続けてくださいました。その確かさこそがアドヴェントに与えられる深い慰めであり、私たちの喜びです。

マタイは神の祝福がアブラハムから始められたと告げています。今日は、旧約聖書から創世記 12 章が読まれました。神がアブラハムを召された場面です。「あなたを祝福する」、「地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る」。神は、アブラハムを祝福の器として選び、全ての民が祝福に与るための道を開こうとされます。“祝福を与える”、“救い主を送る”という大いなる物語が、この時、動き始めます。今の私たちも、この祝福の約束の下に置かれています。神がアブラハムにおいて最も喜ばれたものは何であったのでしょうか。それは、神が、「あなたは生まれ故郷を離れ」、「わたしが示す地に行きなさい」とアブラハムに命じられたとき、その主の言葉に従って踏み出したアブラハムの服従の姿であります。彼の人生の中心にあつたのは、神の言葉に対する、“はい、主よ”と、この応答にありました。その言葉と行いによって、信仰の従順とは何かを示したのです。アブラハムの歩みは、決して、順風満帆ではありませんでした。むしろ、見えない旅路でした。そのような歩みの中にあつても、彼は旅の途中で祭壇を築きながら、“ここにも主がおられる”と告白したのです。インマヌエル(עִמָּנוּאֵל) “神はわれわれとともにおられる”と、聖書が語る神が、アブラハムとも共にいてくださいました。そして今、主は私たちにも、アブラハムと同じ使命を託されています。“あなたを祝福する、あなたによって全ての民が祝福に入る”。

アドヴェントは、祝福を受けるだけでなく、祝福を届ける者として心を整える時です。先の見えない時代、不安に揺れ動く社会、今、私たちが生きる世界は心が暗くなる出来事の連続です。今、私たちの周りには、希望を失い、心が暗くなっている方々が少なくありません。主は、そのような方々の元へ私たちを用いて“祝福を届けたい”と願っております。

マタイの系図が語る救済の歴史は、罪人を排除することなく、むしろ、その汚れや痛みを抱き留めながら、私たちがキリストへと導こうとしています。アブラハムからダビデへ、捕囚の時代を通り、長い歴史の果てに、ついにメシアが誕生した。私たちは、この系図の中にも、ベツレヘムに

生まれ、ダビデの家系に連なる方、この世を贖い、罪ある私たちを救いへと導くことのできる唯一人のお方、救い主を見出すことができます。

主が来てくださったことに感謝しつつ、そのお方を迎える備えを、心を新たに歩んでまいりましょう。アドヴェントのこの時、共に礼拝を献げながら、私たちも主が導かれる道へと歩み出す者でありたいと願います。お祈りを致します。

聖なる神、待降節第二の主日に、来たり給う救い主を待ち望む者として、また、あなたの救いの御業の歴史に加えられた者として、礼拝に招いて下さったことを感謝致します。どうかこのアドヴェントの時、自らを省み、心から悔い改め、あなたを信じ、あなたに全てを委ねて、イエス・キリストと共に歩む新しい一歩を踏み出すことができますよう聖霊が導いてください。

主よ、この世の不安と悲しみのただ中にある者たちに、あなたの慰めと平安が豊かに注がれますように。私たちが、あなたの福音を伝える者とされますように。御言葉に生きる群れとして整えてください。

救い主イエス・キリストの聖名よって祈ります。アーメン。

讃美歌:409「すくいの道を」

聖晚餐 使徒信条の告白 和解の挨拶

讃美歌:78「わが主よ、ここに集い」

献金・感謝(千住由美子)・主の祈り(讃美歌 21 93-5A)

主イエス・キリストの父なる御神さま。今朝も主にある肢々と共に御前に集い、共に礼拝をお献げしてきましたことを感謝致します。

今日は、佃先生の待降節第二主日の講壇から、私たちがこれまで破れを繰り返してきた、そのことと、にも拘わらない神さまの救いと赦し、祝福のご意志と深い憐れみを思います。このことを、深く受け止め、クリスマスを迎えることができますようにお支えください。

私たちは必要な物を主に与えられて、主の僕として生きることが赦されていますことを感謝致します。それぞれが与えられた物の中から感謝と献身のしるしとして御前にお献げ致します。聖めて神さまの御用のためにお使ってください。

主が教えてくださった主の祈りを共に祈り、“主よ、来たりませ”と声を合わせ、心を合わせ、主が教えてくださった『主の祈り』を共に祈り、新しい週の歩みを始めさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌 88「心に愛を」

派遣と祝福(司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべきか。 会衆:私がここにおります。私を、お遣わし下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。)

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:待降節全体祈祷会案内。クリスマス関連教会行事案内はがきの活用案内。

後奏:「神のみ子は来ませり」(M デュブレ)